

もくこうげい
木工芸

＜概要＞

保 持 者

かわぐち せいぞう
川口 清三

碧南市在住、1962 年 5 月 2 日生まれ、（記者発表日現在 満 64 才）

緑豊かな森林に恵まれた我が国では、木材を素材として、生産用具や生活用品などの木工品が古くからつくられてきた。本県においても、三河地区を中心に森林が広がり、木材及び木工品の生産が広く行われてきた。

木工の伝統技法には、刳物^{くりもの}(※1)、指物^{さしもの}(※2)、挽物^{ひきもの}(※3)、曲物^{まげもの}(※4)、結物^{ゆいもの}(※5)などがある。技法に適した素材を選択したうえで、制作工程では乾燥による変形を防ぐために、加工を長期にわたって順次行うことが特色である。近代以降には、伝統的な技法を基に、器形と木取り、木目の表し方に創意工夫を凝らした、木工作家たちによる、美術工芸としての「木工芸」^{もくこうげい}が展開した。

以上のように、「木工芸」は、芸術上価値が高く、我が国及び本県の工芸史上重要な地位を占める技法である。

川口氏は 1962 年に名古屋市に生まれ、愛知教育大学を卒業後、刈谷市内の建具店において建具制作を通じて指物技術を習得する一方、伝統的な刳物技法を習得した。その後も、刈谷市に工房を構えて制作に取り組みながら技法・表現の研鑽を重ね、「木工芸」の技法を高度に体得した。

川口氏は櫨^{けやき}、栃^{とち}、朴^{ほお}、神代杉^{じんだいすぎ}、黒柿^{くろがき}などの木材を用いて、彫刻的な独自の要素をもつ器形に、木目が生かされた作品をつくりだしている。また、数次にわたり拭漆^{ふきうるし}(※6)を施した作品では木目の美しさと深みのある色調がさらに際立ち、重量感のある造形は高く評価されている。乾燥による形のくुरいを防ぐために、木材の製材から作品制作着手、完成までに数年以上の時間をかけている。

川口氏の作品は、実用的な器形を基本としつつも、彫刻にも通じる高度な造形力が評価を受けている。木目の美しさを引き立たせる技術をもち、独自の「木工芸」の世界を追求している。

川口氏は、日本伝統工芸展を中心に作品を発表しており、2007 年の第 54 回日本伝統工芸展で東京都知事賞、2018 年の第 65 回日本伝統工芸展で日本工芸会保持者賞、2025 年の第 72 回日本伝統工芸展で日本工芸会奨励賞を受賞した。また、2020 年に紫綬褒章を受章し、2022 年には第 42 回伝統文化ポーラ賞優秀賞を受賞した。

一方、川口氏は日本伝統工芸展の鑑査委員を務めるなど、後進の指導・育成に尽力している。

「木工芸」は芸術上の価値が高く、本県の工芸史上に特に重要な位置を占めている。川口清三氏は、刳物を中心とした伝統的な木工技術を継承しつつ、芸術性の高い作品づくりを展開している。こうしたことから、「木工芸」を愛知県指定無形文化財（工芸技術）として指定し、川口清三氏をその保持者として認定する。

-
- (※1) 刳物 木の塊をノミやカンナで彫って、形を作る技法。古くから器、農具など多くの生活用品が刳物技法によって作られている。
- (※2) 指物 板を組んで箱を作ったり、板と角材あるいは角材同士を、釘を用いずに組んで、机や棚、簞笥などを作る技法。
- (※3) 挽物 ロクロの回転を利用して、木の板や塊を高速で回転させ、それに刃物を当てて削って形を作る技法。丸い器の多くは、挽物技法によって作られている。
- (※4) 曲物 薄い板を円形や楕円形に曲げて、合わせ目を綴じる技法。曲げて合わせ綴じたものを器等の側面とし、円形や楕円形の底板を付けて器とする。
- (※5) 結物 板を円形に並べて底板を付け、箍（たが）で締めて円筒形の容器—いわゆる桶や樽を作る技法。
- (※6) 拭漆 木地に漆を漆刷毛で塗って、すぐに布で拭き取る技法。漆を乾かした後に再び漆を塗って拭き取る作業を繰り返し、木地を褐色の深みのある色にする。



川口清三氏近影



川口清三氏制作風景



ほおふきうるしもりき
朴拭 漆 盛器

第 54 回日本伝統工芸展(2006 年度) 東京都知事賞

国立工芸館所蔵

奥行 36.5cm 幅 56.5cm 高 7.8cm